

前回シンポジウムまとめ

公共哲学から公共性の思想史へ —共和主義・市民社会・国家—

上野 大樹（一橋大学・日本学術振興会）

一橋大学・社会学研究科は、伝統的に「市民社会」や「市民的公共性」にかかわる社会思想史および社会哲学的研究において中心的な役割をはたしてきた。他方、欧米では 20 世紀最後の四半世紀に入っ
ていわゆるケンブリッジ学派が台頭して以降、コンテクスト主義の方法論にもとづく緻密な分析が量産
され、日本でも『マキアヴェリアン・モーメント』のエポック・メイキングな邦訳の出現に前後して、
共和主義研究をはじめとする新しい潮流からの影響が明瞭に認められるようになった。戦後日本の同時
代認識とも深く結びつきながら発展したかつての市民社会論的な諸研究で対象とされたアダム・スミス
ら「近代市民社会」の先駆的理論家たちは、こんにち初期近代という枠組みのなかで、むしろその時間
的な背後から新たな光をあてられつつある。

本シンポジウムは、一橋大学の伝統的な研究領域であるこの市民社会論の蓄積を、古典的共和主義を
核とする近年のコンテクスチュアルな思想史の角度から見返してみるということを企図して計画された。
かつての市民社会論は、どちらかという政治哲学や社会倫理学の方面で、「市民的公共性」を一つのキ
ーワードとして展開が試みられている。けれども今回のシンポでは、直接に現代へのインプリケーショ
ンを求めるような方向性、つまり公共哲学としての方向性を敢えていったん括弧にくくり、現在の研究
状況をふまえてもういちど虚心坦懐に市民社会・公共性・共和国といった理念の歴史を読みなおすこと
に主眼をおいた。タイトルにはそういった含意もある。今日の市民社会論は、「公共哲学」とならんで、
コンテクスト主義を背景とした「公共性の思想史」として探究していかなければならないというのが、
本シンポの最大のメッセージである。

このような趣旨からして最適の研究者に、今回登壇をお願いできた。パネリストの植村邦彦教授（関
西大学）は一橋大学の良知ゼミご出身で、戦後日本の社会思想史研究をその中心で吸収しつつも、近著
の『市民社会とは何か』ではケンブリッジ学派周辺の大量の研究成果をも駆使して日欧の市民社会の理
解にかんする通史を書き上げるという大業を達成された。特に今回のご講演ではスミスやファーガスン
といったスコットランド啓蒙とヘーゲルとの関係をとらえられ、現在にいたる一橋の社会思想・哲学
研究とも共振するところがあったのではないかと思う。会場とのディスカッションでは、まさにこの領
域の先達といってよい平子友長教授より示唆に富む複数の発言をいただいて討論は白熱し、また平子教
授と植村教授のあいだの議論では報告者（上野）自身たいへん啓発されるところがあり、有意義だった。

コンテクスト主義の思想史はとりわけ初期近代研究として発展をとげてきたが、ただしポーコックら
の影響もあって、その歴史的重要性は否定すべくもないとはいえ全体的な関心がやや共和主義(civic
humanism)に偏重ぎみだった点は否めない。二人目のパネリストとしてご登壇いただいた木村俊道教授
（九州大学）には、「宮廷」や「帝国（国家）」をキー概念とした近世思想史の再読をつうじて、ポーコ
ックが「マキアヴェリアン・モーメント」という枠組みのもとフィレンツェの政治思想から一足飛びに

17 世紀半ばの革命と共和国建設を説明しようとした近世イギリスの理解の枠組みを問いなおすためのご報告をお願いした。また報告者（上野）自身も、ヒューム・スミス・ファーガスンらを生み出したスコットランド啓蒙の初期を代表する思想家ハチスンをとりあげて、初期近代という思想的コンテクストのなかでいかに古典的な政治哲学が「商業社会」としての文明社会に適合的な社会哲学へと脱皮をとげていくか、その内在的な転換の一断面を描写する報告をおこなった。両者の議論のなかで、初期近代における宮廷を有する君主政や帝國的支配の重要性をふまえて共和主義の受容や拒絶を再吟味する必要がある点が確認されたほか、18 世紀における公民的人文主義から商業的人文主義への変質という問題系のなかで、しばしば商業社会と同一視される「文明社会」についても、商業の世紀に先だつその“前史”がもつ独立した意義が評価されるべきだという見解で一致をみた。

本シンポジウムでは、初期近代という長期のスパンを設定するだけでなく、空間的にもイングランド、スコットランド、ドイツという複数の国をまたいで公共性の思想史を探索することを重視した。国民国家が本格的に成立する以前のヨーロッパの社会状況にあっては、このインターナショナルな性格の把握は思想研究にとっても本質的である。一国史的な視点にとどまっては、思想伝播のダイナミックな動向をつかむことは到底できない。しかし、ポーコックがその主著において共和主義の諸モーメントを描くに際してイタリア半島から一挙に大ブリテンに跳んでしまうという「トンネル史」を採用したことは、驚くべきことに、大陸ヨーロッパに新たな思想史研究上の空白を生みだしてしまった。このギャップは Q. スキナーらの大規模な共同研究によってかなりの程度まで埋められたが、この点については日本ではいまだ大きな課題として残されている。今回、19 世紀初頭のドイツの思想状況は植村報告で扱われたが、フランスについては報告者（上野）の準備不足もあってほとんど触れられず、またフランス革命以前のドイツの状況にかんしても講演のほうではあまりとりあげられることはなかった。しかし、討論では多地域の研究者からの発言が活発になされ、長い 18 世紀の大陸ヨーロッパの思想的布置をめぐっても、議論を通してたいへん重要な見通しが浮びあがってきたように思う。社会思想史・社会哲学分野での学的伝統に裏打ちされた一橋の奥行きを感じるとともに、それがいくつかの隣接領域と一種の化学反応を起こしてさらに厚みをましているとの印象があった。折よくシンポジウム直前の個人研究発表では、小谷英生氏による 18 世紀ドイツ「通俗哲学」についての報告があつて両者のテーマには内在的なつながりがあったように思えるし、またフランスにかんしては森村敏己教授や淵田仁氏らからルソーとの関連などについてコメントをいただいた。この論点を詰めていくためのいくつかの端緒が開けたように思われるので、今後機会が得られれば近年 B. ベルナルディ（淵田氏が精力的に翻訳・紹介を進めている）らによって精力的に論じられているフランス啓蒙と古典的共和主義という問題設定を展開していくための場も設けてみたいところである。

実際、初期近代ないしフランス革命以前における大陸ヨーロッパでの共和主義の受容と影響という問題をめぐっては、加藤泰史教授の科研費基盤研究 A の主催で 2015 年 1 月 31 日に開催された「第 2 回スピノザ・コネクション」（「第 4 回一橋哲学・社会思想セミナー」として開催）にて、報告者がその一端を検討する発表をおこなうとともに、佐藤淳二教授（北海道大学）にもルソーについて関連する発表をお願いし、本シンポでのテーマをライトモチーフとした研究プロジェクトを継続中である。そこで主題のひとつとしてとりあげたのは、マルチチュード（群衆）とコモンウェルス（共和国・公共性）の問題系である。いうまでもなくこれは、現代の政治哲学ではアントニオ・ネグリによって注目されたテーマであるが、ここでもこれらの諸理念（的現実）を思想史のコンテクストに置きなおすことで見えてく

るもの（およびそこには還元できない次元をも照らしだすこと）を重視して検討をくわえた。ただし、このトピックにかんしてはよくも悪くも注目を浴びている「ラディカルな啓蒙」という見取り図を提示している J. イズラエルの諸研究のある程度の検討が避けてはとおれないが、今回の議論ではもっぱら表面的に触れるにとどまり、今後もう少し掘り下げて論じることが必要になるかもしれない。

また、書籍化に通じるプロジェクトとしては加藤教授にも参加いただいた論文集『公共圏と親密圏の思想史』（仮題）が近く京都大学学術出版会より公刊の予定である。しかしながら、執筆・編集作業じたいはかなり以前におこなわれたということもあって、残念ながら以上のような問題意識が明確なかたちで反映されているとは必ずしもいえないかもしれない。今後はそこでの議論を土台としながら、本シンポで得られたいくつかの論点と見通しをもって、共和主義を重要だがあくまで一つの構成要素とする初期近代の複合的理解を構築しつつ、市民社会と（市民的）公共性の系譜を追跡するなかでいわゆる「近代市民社会」を歴史的に再定位するための作業を少しずつ進めていきたい。その際なかば当然ではあるが、歴史と現在の往還運動のなかであらためて「近代市民社会」の成立を考えなおす過程では、「公共性の思想史から公共哲学へ」という逆のベクトルがふたたび前景化せざるをえないのであり、その意味で現代政治哲学や社会倫理学との再接合が図られなければならないという点は忘れてはならないだろう。